

〔目的〕 前2報<sup>1)</sup><sup>2)</sup>から談山神社嘉吉祭の神饌である高盛りの供物は春日大社や法隆寺と類似のものであることから、中世における神仏混淆時代の所産であろうと報告した。本報では嘉吉祭の起源から今日に至るまでの時代背景と供物の変容から中世における多武峰の食文化を考える。

〔方法〕 1911～1992年の現地観察および聞き取り調査をもとに『談山神社文化財目録』より文献調査を実施した。

〔結果〕 白鳳7(679)年、藤原鎌足の長子定恵が唐より帰朝し、多武峰に十三重塔、妙楽寺を建立、大宝元(701)年に聖霊院(神社)を創建し、藤原鎌足を祭神とした神仏混淆の形態で創始されたが、明治2(1869)年廃仏棄釈を行い談山神社となった。

染めた米、木の実、果実を高盛りにした神饌「百味の御食」を奉獻する嘉吉祭の起源および祭祀の内容は『紅葉捨遣』(元文3[1738]年)、『三番行事記、三番行事記附録』(宝暦13[1763]年)、『譚岑造宮記第四第五』(享保19[1734]年)、『古式乃美天倶楽』(大正6[1917]年)に記されている。記録によると“神饌”の内容には染めた米、木の実、果実の高盛りに加えて香爐、三品立、子ツテ、カタマワリなど“仏供”に起源が求められると考えられるものが多く供えられるが、それらは高杯に盛られ、その祭祀伝供の形式も第一に奉幣、第二に無垢人さらに神盃、神箸、瓶子など神饌供進そのものであり、特殊神饌として多武峰独特の食文化を創りあげたといえよう。

1) 日本家政学会第44回大会要旨集, 174(1992)

2) “ 45回 “ . 169(1993)